

説聴の法軌

道綽禪師の『安樂集』に出てくる言葉です。もちろん親鸞聖人の『教行信証』にも引用されている文です。説法する場合、それを聞く場合の方法ということ。

説法の人においては医王の想いをなせ、抜苦の想いをなせ、所説の法をば甘露の想をなせ、醍醐の想をなせ。それ聴法のひとは、増長、勝解の想をなせ、愈病の想をなせ。もしよくかくのごとき説者・聴者は、みな仏法を紹隆するに堪へたり。つねに仏前に生ぜん。話が、出来ない、聞けない方が多くなっています。

それは、話が、軽くなっている時代なのだろうと思います。どうでもいい話を、もつともらしく話す人、涙を絞るだけのような話、その場が面白ければ良かった好かったで満足してしまふ聞き方。法話のときは拍手しないで下さいといわなければならぬ、けど実際は拍手が起こる。拍手とは違ふのだがなあと思う。

甘露、醍醐の想いをなせというのは、話し手が、語る内容に喜びを味わうことです。聞くほうは、しっかりと理解して、自らが成長し、病が治る思いで聴け。